みちの

二十四

哥城名らをの

c.V.40

PL788
.4
.G4
1654
vol. 40
copy 1
Asian
Japan
Lage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

45

源氏五十一下の恵より枯草を

むしされのよいうまづしひ給しれこちのうち
いとあづしく成ぬてそこはことなくなやミわたり
給ことひさしくなりぬいとおどろくしうへあし
れど年月うきなれば、それもしげなくいとゞあえ
うまなりまさりのへる浪院（源ム）のおもほしなげくこと
限なしさぞしまてもせられまそく給ひんことをぞ
いとゞうるべく思しこげ（笠ム）うしれれこちらは、この
世まあらぬことなく、うしろめたきほどしぞ
まじらぬれ身なれば、おもぶちなりうけやらぐ見
まほしきれ命ともおぼされぬをさしごろのれ契
うけたなれ、せひ（源ム）なけうをしてまつしんことのこぞ

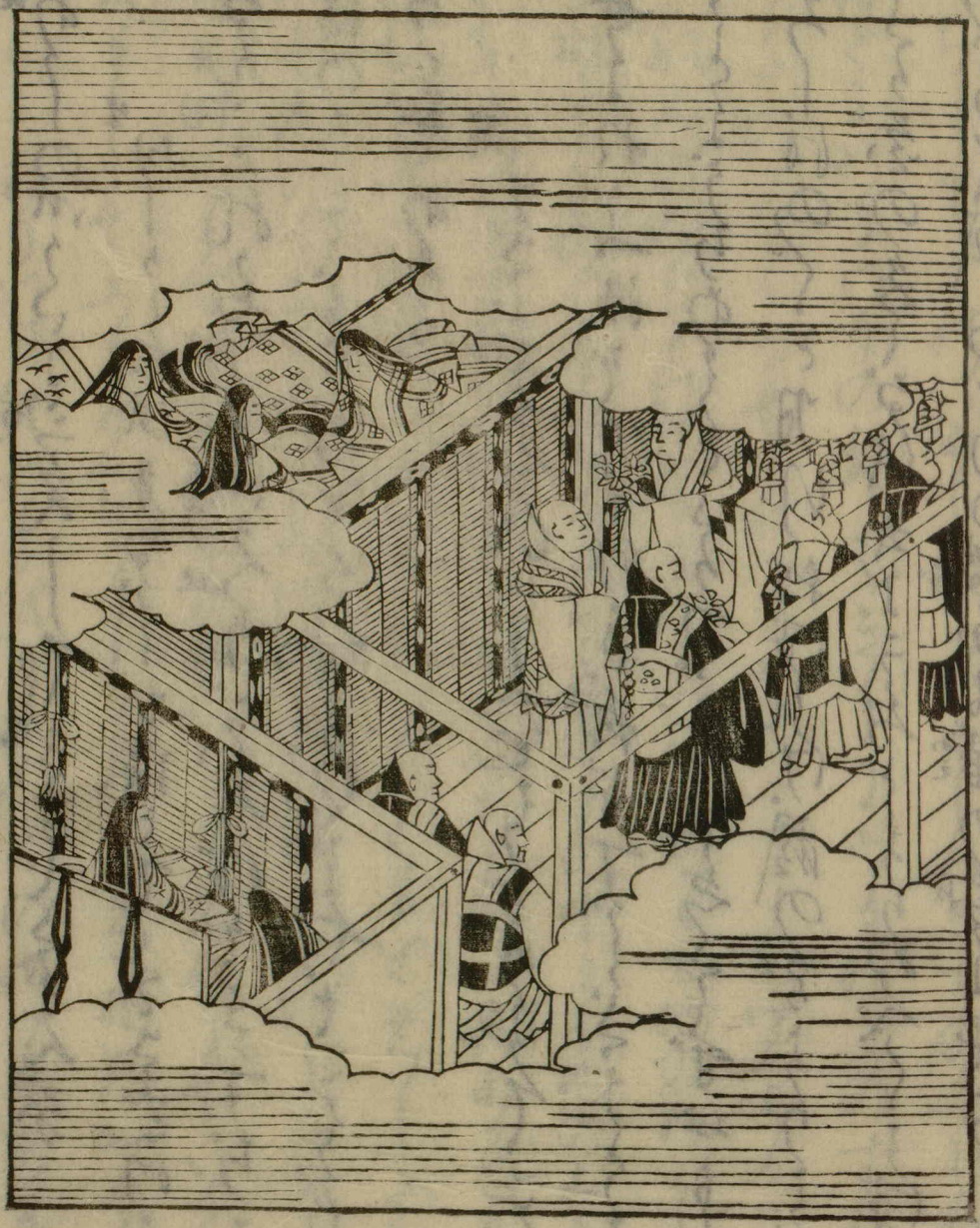
人しれぬれうろのうちにも抽あそれにおぼされ
けり。後の世のためにとこうときことにもなおぼく
をさせ給つゝいでなる紙ほいあ家さ雨になるまて。
しばしもうくづゝりん余の程ハをこなひをまゝぎれ
なくとこゝゆゑなくおぼしのこまへどさこにゆゑし
きこし給ひずさ家ハ口がれうろにもしかおぼし
そめたるすぢなれバかくねんぶにおもひこまへな
ひいでにまもうかされておもしなるもいりなんと
おぼさどひとこび家をしこまひながりにもこの
世をへりこんといおぼしをさてぞ後の世には
おもしに道の座をかんとちぎりかりしかしめて

これ三波かけ給ひ中なれどこゝちなぐしけと先
給へんほどハおなじ山なりとも峯をへぐてく
あひこましぬすこゝにかけたなれなんことをのこ
なげしまうけたるにかくいとこれもしげなる
海におやこあつかひ人へいとこゝろぐるしき
ひまさ海を今ひとゆきもなれんさざこゝには拾
ごとく中く山水のすゝかにぐりぬべくおぼし
とぐこほかほどにぐうちあさへたる心のまく乃
ぎうん
為心をこす人ごにはこゝなりをこれなぬべかめる
ほノ
ひゆるしなくてこゝろひとけにおぼしたくむる
さ海あしくほいなきやうなれバこれことよりてぞ

女（法）志もうしめしくしきてし給けり。門（法ん）が此身なりを。
つきうろうまじきまやとうしろめたくおぼされ
かりさし（法ノ地）げけるくしれ此（ごぐん）軍にてうせなり給けり。
法（かけ）蓋（こうり）種（せんぶ）千戸いそぎて供（くぐ）養じぬふ。門が此とれと
おぼまて二条院にてぞし給ける。七僧の法（かうぶ）服などを
たれぐ給ひす。ものゝいろぬひめよりまちじめてぞ
りあることゝぞりなし。ちるなりごともいと
いうめしきまぎどもをきしれるを。こくくしき
さ後まもさ（法ノ）てし給ひぞりなれば。ふ（法ノ）ちしきことゞもを
らせ給ひぞりけるに。女（ん）の此なりきてゝりまいらせ
かく。仏のみまさへうひ給ひ此ところの御ぞ法。

俵(ほ)いいとかぎりなしとこまりまて、おほかたの御
もろしひおまかれことだらりをなん、いとなまかを給
けり、示(ぐ)人舞(まひ)人などれことは、大(タ)将の恵さりつきて
つうまつり給、内(今上)、去家、さきいの家(杜好 明石女法示之)たちをたじめ
ありて御かたぐ宴(うて)しこまこず程、ほうまちなど
ぐりのこと紙、うちし給ぐる所をきこままして
まれこの御いそぎ紙、つうまつらぬ所なければ、
いとこちたきことぞあり、いつのほどまいとかく
いろくおぼしまうけんげまいそれかこれ世ゝを
へたる御(ぐん)報まやとぞこえたる、茲ちる里と異し
御かたおしなどもつうまへり、南東(ミなミ)の戸(ひがし)を

あけておりします。しん蛍の雨のぬりごめ吹かり。
ふるのひさしくりふるぐの此ばれどもも。
さうじぢりをへぐてつくしたる。弥生の十日
なれば。菅ざりまて。宅のかしきなどもうらくかな
まれおましろく。仏のおりすなるさしろのありさ海
とをかしず。せひやしれてことなるふるきこしろも
なき人さへつゝ紙うしなひ川べし。薪うるさん
ぶんのこゝもそうしつどひたるひぐさ。おどろく
しき紙。うちやすまてしげまりたるほどぐる。袁は
おほさるくをまして。このごろとなりておなじとな
つけてもうろぼきくのゝおぼしたる



あしのはかくまに白変して笠ノ きてしたまへ分

笠 おしかねは男なりしも限とてたさぬ門き

なんことれなりしき笠ノ地へりこころぼそきすぢも

後のきてもこころをくれたるはぎまやそこもとと

なくぞあめる

笠 たさぐこうもひはかふをもしめりてこれ

世まねがふ法ぞもかけき地もすがらうとき

ことまうちあもをたるつゞこれこゑたるぞおもし

ろしほのぐと明り和ぼしけ闇のうちよりこえ

たる笠の多くなほ其まこころとまりぬべくまほひ

ひたりてぬしちどりの鵯分も笛の音まをとしぬ

ひらてがしちどりの嘴なも緒の長なとしぬ

二五

心ちして。まれくあそれもおもしろきものうしぬ
ほどまれうひうの辭てきうまあるほどの。すゑ
つるのがくとなやかにまぎたしく。事ゆるに。
これ人のぬぎかけたるまれいろくなども。地のおうし
まおうしうのこ見也。みうたち上遊アの中にも。地の上手
どもてのこさず遊び給。かしも心ちよげに。具あり気也
どもお紙に給にも。掛りすくなしと。身をそしたる。
れこそのうちにはよろげのこと衣におぼしたまふ
昨日例なしずおきねさをまへりしぬ所にや。いと
くるしうてふしまへるとしどろかな地乃おりも
ごとにとおりけどひあそびまふ人ぐの。れうたちも

さ夜のなれがぞくぞえどもこと笛の音をもかしや
きくぬべきとぢめあるらんとのこゝおぼさるれど
こしもめとまるまじき人のかかどもくおかれこ
こまるされ給まして夜冬の時まつけらる遊び
こゝふれまもお夜いどましきしるのころいをの
づゝこちまじ里もすしめどさすがまなさけを
かしぬふるぐい誰もひさしくとまるべき
世まはあらざるれどまづまれひとりゆくゑしらず
なりなんをおぼしつゞくらいこじう哀なりこと
こそくなれがぞくへり給なんとするもとをさ
もれめきておしまる茶ちる里のれかるに

なんぬべきこのりなどにぞこれまるく世にも
とむすぶ中れちぎりをれかへり
むすびをくちぎりは絶じ大かたの縁りすく
なるきれ法なりともやがて此つゐでにふぶんの縁
をんぼうなどこゆゑなくこうときことぞをきせ
ぬふこぞ法もことなるしもこゑで行へぬれば
間のことに成てうちもへさるべき事ぞなどまてぞ
をきせ給けるなりけるなりてもれいのあけさり
さへいとゞきし入ぬめべきなりくなほうるそのこ
とにおどろくしかしぬれこうちなれどこゞ
いとよいきさ後になりこまへれば むけうしげに

取をくなやこ給こともなし。さふしふ人ども。いかり
おりしまさんとすらなかとしたひよろこも。まげかき
ろしあたしうりなしき此ゆさ面とこまる。
りくのこおもすれば。中宮（昭和本宮ニ初て中宮と云り）この儀にまうでさを給。
ひんがしのくいにおりしますべかれど。こちらに（二条院にて之）（紫ハ西対之）
もる物きてしまふ。俄式（ぞくしき）など例にかりしほど。この
世のゆさ面をこそてぞ此ぬるなどのこおぼをば。（紫ノ）
よろげにつけて物哀なり。名対面（なだいめん）をさく給にも。（紫ノ）
その人かれ人などこゝとゞめてきられ給。上達ア
などいとおほくつうまつりたまへり。ひさしき（昭和本宮ノ）
右対面のとぞしを。めづらしく思して此物語（紫ノ）

ご海やうに罪し給ひ候いりまして今程はすぐなれたる
心らしてむさくなりやまうりてやすこ給ふんとて
つくりまぬおさねまへるをうれしと思しうも
いともうるさ行のれなぐさめなりうるぐなり
おいしましていおもるまつたしせ給ひんもうる
じけなし兼んこともうるまりなくなりまて給れば
とて志げしはこなるなりおいすれどおしの
此方もつくりまてこころふかげにしげまりたる此
物誠どもこそしかけし給上はれこころのうちに
おぼしめぐらすとおぼれどさしげにおる
らん後なぐのまひ出ることもなし。こぐなべての

世のつゐなきを稽をおほとうことずくなく
抱かしおきはかはあらずの給なしかけれひ
などぞことはおこらんよりもあられる抱こうろ
ぼそきれかしきはしるうこゝろ今上ノ実こちをこゝなり
ゐふてもおぼれくのれゆくすゑをゆしくも
罪けるこそかくもれかけるをおしむ心の
まじをけるまやとてなうぞぐこゝゐへ家れかの
まほひいこじうおしげなりおぼうのこ笑し
こんとおぼすは中実うちなきゐぬゆしげる
などいこさてなし給ひずもれくつゐでなどまぞ
年代つうまつりなれたるひとぐのことなる

よるべなきいとおしげなるは。これ人それ人なしが
ありさまのちかはれ（明石中宮ノ）こゝろとゞめて。ぞ〇おかはを
あじぢらりさて給けり。ことゞ（明石中宮季氏後室之地）経あまらりてぞ。
（明石中宮）（爾ノ封之）れいのつれ〴〵すまうり給ぞ。三の（白）宮もおもひまはれ
中よびとおもしげまでありさまみだれ（詞ノ）こゝちの
ひまよはま。すへまたすへなりあそびへのさゝめまよ。
（詞）まろがゆうざんまで。恋しむあんやと男のへだ。
（白詞）いと恋しうちあん。まろがうちのへ（合上）よりまこゝや（明石中宮）
うりまげ（詞ノ子）ざそまさりて心ひ字ゆれ。おりせずと
心らむつしうりあんとそめをすりまさぞしう
かへるさ便おもしろれば。（詞）何ゆゑこちぞしあまされ

蕭ぬ（おち）おとなる女のひなげ。うゝすこのて。これ
さいのまへなる紅梅といと様とは。菊のありくま
うゝとゞめてもてあそびのへざるべからんありも。
仏にもなりのへとこそしきまへが折（白ん）うなげきて。
此かみをまもりておこゞのおけべかれば。立て
おりしぬ（塗ノ白を）どりつきてあつしきてなりのへれば
このこや（白）と姫（女一文）家とをぞ（塗ノ心）こさしきて給ひんこと。
口おしくあたれりおばされける。秋約つけて。
世中すこし涼（すゞ）しくなりて。此心ちもいさゝか
さはやぐやうなれどなほとゝすれば。ぐとがまし。
さるは外ましむぞうりおばさるべき秋風なるほど

歎きかなしみ給ひけるが。中にも御台ハあまり給
なんとすると今さらハかなしさよとよばゝりて
まはりまへばともどもにさしつかれやうりはおり。
途ちのはつのひの隙あきもなくしづかなれバさしも
哀てし給ひぬよおもてにもえうかり給ひてバ御台ぞ
わかり給ひけるがかなしくもなれど。げにうらみぬも
うらみしとそこにありしかれどもひとつひとりもとつ
きかせ給ふことなりやとはかりのかれどもかなしくて
まそあてまち夜めしてとれ涙ちかきもまさり
ためでたりけれどかしこくおまりし月日も
あさくしおかせし盛ハ中に此世の夢のつれづれ

まもまそへられぬひしを、恨もなくらうたげに
おしげなるはさ雨まそいとかりそめに世紙をひ
ぬへるはしきゝ、ゝる物なく心ぐるしく、すゞろに物
がなし、風すごく吹出たる夕、蓍りをんざいこ給
とて、けうそくによりぬぬへるを、院にうりて三年り
ぬて、ゆふいとうくおさねぬふめりは、これおまん
まそはこゝなく、はこゝろもそれぐしげなめり
しとそこてぬふ、かぢりのひまあるをもいと
うれしとせひ、そこてぬへるはかしきをこ給も
こゝろぐるしくつゐにいつ見しさはがんとせ
あもれなれど

とくとうほどぞちるさともすればうぞ
こぞうしこぞの上(うえ)家げ(ほん)よぞおれうへ星とまる
べうもあしぬ宮のつゆもよそへられうるおりさん
志のびがうさ後
やしもきげきしをあしそふ家の世をとられ
さほどうほどへずもがれとて(地)此洞をもしひあん
始もずこや
秋風(四年六)にしげしとましぬ家の世を誰(た)か星
紫の上とのこゝろんと(地)罵しかもし始れうちども
あらまほしくこゝろひあるようけてもよとを後
すぐすもざもがれとおぼさるれどうろこゝろうぬ

ことなれば、かけとめんかたなきぞかなしかるまろ。
今ハ（紫詞）けてしせ給ふ。こゝろ心ちいとくるしくなり
給ひぬ。いふかひなくなりにけるほどいひなぐし。
いとなめげに給ひやとて、こ（地）きすひきよをてふし
なへるさ海のつゝ。よりもいとこれもしげなく
こしなへば、いかにおぼさるしにかとて、宮（明石中宮）ハ此でを
さしへてまゐりて、なくくこなり給ふ。まことに
きしゆく家のこちたてかゞぐりにこしこまへば、
こ寺程のつかひどもかずもしらずこちさわざこり。
さはぐもかくていきしのふおりにあらひのてが
もれくけとうたゞひのひて、夜一夜さ海ぐ去

ことをしつくさせたまへどかひもなく明もつる
ほどに消(きえ)もてゆぬ。こゝやもかへり給ひてかくてこそ
つゝみへる紙かぎりなくなげす。これもくことゆゑ
別にて。さぐひあるこゝもなげされず。めぐらかに
いとしくあけぐれの夢にまどひぬしほどさし
ありや。さしき人おもせざりかり。さふらふ女房
などもあるかぎり。さしき地なげしたるし。院(源)も
ましてなげしたびめんかたなければ。大(タ)ねのさえ
ちらく乗りぬへる紙。此(源)平丁のもとによひよをなり
ぬてしかく(詞)今は限のさ夜なるをさしぞのほいあるて
おもへること。かうそぞこゝにそれなもひたがへる

やえなんかいとくなしき紙。此かはらうしさふしふ
ぶとうたち。ど經の僧なども。これこゝろやめていでぬ
なめりを。さりともこちとまりてもれすべきもあらん。
この世にはむなしき心ちすりを。仏の此志なし。
今いかれ分しきほのとふしひにぐるこれ三月
べき紙。しらおろすべきよし。ぬしなへ。さるべき
僧これかとまりこるなどのなふ此気色。心地げらく
なげしなすべかれど。此分の文もあらぬさ海に
いとじくこへか。此洞のとましぬを。ことなりに
かなしくこまり給。此詞もれくけなどのこれも人志
れこゝろこぐらんとて。かゝることもえしらべ。家紙

れてろうこんとてかろことも[illegible]

さもやおりしますらん。さしばとてもかくても此
ほいのことはよろしきことなりたべるなり。一日一夜
まてもいむことはしるしこそはむなしかしぞ
たべなれど。まことまいふひなくなりたてさせ
なひて。後のれぐしぞうりをやけさせなのても。
ことなかれかれはひうるともなしせ給はざらん
もれかし。かれまへのかなしひのまさるやうまて。
いかゞ作るべからんと申ぬて。此(地)いたりこもりさ
かしふべきうろざしありて。まぞぬそう。そ乃
人かれ人などあして。さるべきことぐも。これ悪(タ)ぞ
をこなひ給(ん)さしばなりやかやとおほけなきうろ(タノ)は

なりしかどいかなるこんせうりありしだうりも
こまらん。ほのかにも此(笑ノ)しゑをとゞまさぬことなど。
こゝにもたゞれずおもひつゝりつゝもれを。声も
つゐにきかせ給ひぞなりぬるうしてはあめれ。
むなしきれかしまても。今てこびこまらんの心ざし
かなつべきおりは。こゝいまよりほかり。いかでか
あらんとせよ。つゝこもあへずなかれて。如房のある
限さけぎまぞつ紙。あなかの夜しばしとしづめがね
まて。此手のうゝびし紙。もれの給まざれにひき
あげてこゝまへはほれぐとあけりひかりも
おほつかなければ。おほとなぶしちかくかけて

こなり結ぶ。おなぎうのくしげゝめでたうこそしま
こゆる。地かかのあたらしさ。これ夕みまゐ
のぞきのつ浪ノ流くおもなぐちまかくさんまゐ
こゝろもおぼされぬなめり。句くちまごともまた
うたしぬ気色なるべし。恨のさ夜いたるかりけるこそ
とて。此袖をかかまをしあてのへる程。夕ぬの恵も
泪にくれてめもこゝ結ぶぬを。ムたゐてたゆりあけ
てこなるに。中々あるぞなるしきとこぐひなさ
に。まことにこゝろまどひもたぬべし。此坐ノぐしのこぐ
うちやしれのへるほど。こちらくさまらしまそ、夜
ぐりこぐれたる気色もまう。つやくとうつくしげ

なるさまぞうぎりなきひのいとあるさまは夜を
いとしろくひかるやうまてしらくうちまぎしいす
女ノけしやうすかる
ことありしうつのはもてなしうりもいつひ
なきさ海になるごろなくてふしたまへるは
うりさ海のあるぬ事なしといんもさしなりや
なれめかぐるあしずらぐひなきをこはるにして
いふ玉しねのやうてこれはりしるとましなん
とおもほゆるもまりなきことや

地つうまつりなれたる女房などは、抱おもはゆるもなれ
ば、涙ぞなるまごとも見しつれずおぼさるゝ心ちをおれ
がちるまづめなて、恨のあことどもしのふ、いうしへも
多角葵上若つぶへ
なるしとおぼすこともおまたこゝ給し御力なれど
いとうおりたちてはまぐさしり給はざりけること紙。
すべてきしたりすゑたぐひなき心ちし給。
やがてその日とくおきめなりかざりなさけること
なれば、かしら紙こつもえすぐし給まじりけるぞ。
こゝろうき世中なりけるは地ばかぐとひろき堂の。
所もなくたちこゝてかざりなくいかめしき
さほうなれど、いとさうなき蛭(ゆり)まで、ほどなくのぼり

さぼうなれど、いとしたるさ脇にて、ほどなくのぼり
絵ぬるもれいのことなれどあへなくいとじ、中を
あゆむ心ちして、人にかくまてぞなりしまし、けり
をこそまつる人もさばかりいつしさ出身をと
他のころしらぬげすさへなるぬはなりなりれ
とくりの女房にまして美濃にまどふ心ちして、
くる夜よりもまろびなちめべきをぞ、もてあつかへ
けるむしし大ねの君れ菱もしぞうをあへりし時の
あり月をさひ出るにもかれはなる氏もれくなげく
けるにや、月のかかのあさしかに見えしをとあつ
こゞくれまどひぬへる、十四日にうをまてこれも
十五日の曉なりなり日はいとしたるやかりさし

あがりて、皆遇の家もうれうる海なくて、世中
きしつゞくるにいとゞいとりしくいうじけれど
とくるとてもいく世々はふべき、かゝ家かゝるしきの
まゞされに、むかしよりの此ほいもとげまかしく
おもほをどゝころよはさ後のそしりをおぼをば、この
ほど紙すぐさんとし給に、胸のきさあぐるぞうん
ぐさうけるお夕の表も此いうりこもるまてお
りしき海にもまうで給ず、明菅ちうくさふしひ
て、心ぐるしくいうじさ此そしさ紙ことゝりに
るしくこまりまて、よろぶになぐさめ罕れまふ
風聞かぐらて明夕菅に、昔のこと思しいでて、

ほのまゝこそまつりし物をと、忘しく思し給ふ。
又かぎりのほどのゆめれこうちをしなど、人しれぞ
せひつゞけ給ふ。さんがさくなるしければ、人めなは
さしもえしじとつゝて、阿弥陀仏(あミざをけ)くとひき
給ずゞのゝずまもまぎらかしてぞおもふぐのおもも
てけち給ける

いまし(タ)人の秋のゆふべの忘しさにいまもとく
こゝろしあけぐれの夏ぞおぼりさへうゝるもけ事。
やんごとなさ給どもさふらいをなて、さぐまりたる
念仏をばさるゝ事れまて、法華経(おけきやう)などずぞきを給ふ。
かゝいと哀なりふしてもおきてもおもふぐのひる

よるくさりふるがりてありしくし給いかん
よりは男のありさ後ぬげしつゞくるまかゞこる
こゆうげをもしめて人にはこと女けるこゝろがら
いまけるさ程よりうるしくつ○るき世をさひしう
べく私ちどれすゝめ給けるまをこゝろづよくすぐ
してつゐるきしるけさ紀もらゝあしあしじと
おげゆうるしき紙こゝろかれいまはこの世り
うしろめたきことのこゝぞなりぬひたゝなをこ
なひにをもひきなんにさりぞあるまじき紙いと
うくおさめんかゝるきこゝろまどひにてはねがりん
君にも入がたくやとやしましき紙このさひすう

乃にも入がたくやとやくましき紙このさひすう
なれめにますれさせぬへと、いつこぞ仏(おそけ)と念(れん)じなり
給、(地)前ぐのれとふしひ、内(今上)をもじめなりて、例のさゆう
ぢうりにはあらずいとしげくさて給、(深ん)意しめし
こうころのほどにはさしにあまごともめにもこく
にもとゞまらずこころにうりぬつとあるまじ
なれど、人にぼけぐ志ささ夜にしじ、今さしに
我世れすゑまくなしくこころにはさまどひ
にて、世中をあんそむきにけるとおぶれとゞまらん
之紙、意しつくむにあるん、三紙こころにまうをぬ
あげさをさへうちそへ給けるちじのおとゞ(いんぐ)長をも
ありすぐし給ちぬれ心にてかく世にしぐひあく

抱し給ひ(塗)とれ。そうなくうせ給ひぬること後。ぐち
おしくおもれに覚して。いとしばくとひきそ
ゆふむかし(夕)ちゐの出もてうへ(葵)うをゆへりしも。この
ごろのことぞしと覚しまうにいと抱がるしく。
そのありかれ出力をおしき罪給しひとれ
おほくもうを給にけるかれ。をくれさきぐろほど
なきせなりかりなど。しめやかなる夕菅にあるが
給。そのかしきもたゞなるに。ぬ子の(柏ノ牙)蔵人のかゐ
してなり給。おもれなることなどこまやかに罪
なてをしに

(以)いかしへの秋さへ今のうちしてぬれにし

袖に露ぞおきけるよりしるゝ涙のかゝると
思ひしられておほかたの秋のならひ
なきあはれさをみるにも人あはれなる
まことに哀れなり
宿けきは山里にもおもはずあらん
秋のよそつくされ心にくきこゝろのまゝに
思ひまち所給ても心をつくしめぐりめ
ゆめべきおもひのこゝろざし侍ればめやすき哉
思ひくの事紙ざりあはぬれとあらしひのうき
有りあはらしく候へばこそ給ふすことの給ふし
よりは今すまうしつ侍やのまでそまうれけり世中に

さいはひありめでたき人もおいらするこの世は
そ○まれなれはさはつけてもこゝろのかざりせざりて。
人のこゝあはれしき人もおろかをおやさまですなほ
なる人にもうけ（うけひかれさん）られたるすくなしぞ語ことも。あまは
ことにつけても世にほめられ心よくておりあしは
つけつらうしくおりふしのあはれひとみ
れこゝろざしありしましもおのまさきおほよその
人さへそのところは風の音虫の声につけておなじく
ともあはれなしましてほのくまもえてまうりし
人のせひあはれさむべき世なりけれむつましく
つゝしまうりあれたるひとぐさもしも御かうけ今

うしめしきと紙ちげきつゝおまはちりこの世の
ほかれ山ずゑなどにぞひころもありけり。法泉院の
秋好 ちさいの宮よりもおもれちるれせうそこゝえず
つきをぬことゞもきこてゆひて
秋好 かれもつる野遊をうしとやなき人の秋に
ころをとゞめざりけん。いまなんことゝもりしられ
侍ぬるとあけるを。抽(源氏)おぼしぬれころまもうち
かへし垂がくこゝ給。いつゝひありおしかゝん
かたのなぐさめにはこの宮(秋好)ぞうりこそおりしかれ
といさゝかもれまぎらくやうに笑しつゝくるまも。
閑のこぼるゝを袖のいと海ちくえうきやり給もず。

のぼりましくもねなぐらもくへりこよはれ
あきたてぬつ〇なるぬせるなしつこゐてもと
ぢりおなぐめておりす。しくよりまもおぼされず。
これなぐらこれはうほれぐしく。笑ししら
なることおぼうまぎらりしに。女ぐさまぞおりし
ます。仏の此前に人しげうずもてなしてのど
やうをこなひ給。ふとせをもちともにと笑し
しらと。恨ある別ぞいとくちおしきわざなりけ。
今はたちすの家もことくにまぎらまじく。後の
世をとひこゝちにおぼしらることゆゑなし。
されどひと字をたぐうりこまふなん。おぢきなり

けり（地）けぢれことごもさらぐさくのなひ（法ノ）丞けり
ことなりければ大（タ）ねの君なんとりもちてつかう
まつり給けり（添ノ）式ふやとのミワゞ方もころげかひ
をこれなふありおほうをさらくてけもりけり
も養のこちのこす中（明石ノ）宮などもおぼします
なく時のうちなくこひきこえなふ

二十七終

69038
6A878